

## 平成 27 年度釧路湿原国立公園エゾシカ捕獲手法検討 実施結果概要

(平成 27 年度釧路湿原国立公園エゾシカ捕獲手法検討調査業務報告書抜粋)

### 1. 平成 27 年度捕獲手法検討の概要

平成 27 年度捕獲手法検討に当たっては、以下の事項について実施した。

- ・達古武地域において大型囲いワナによる試験捕獲を実施する【継続】。大型囲いワナの位置を少し湿原側に移動する。
- ・簡易囲いワナの技術改良を行うとともに、湿原内などの環境における簡易囲いワナを試験運用し、その有用性を検討する【ワイヤーメッシュ改良型の再試行・体重計測式簡易囲い罠の試行】。
- ・平成 26 年度に GPS 首輪を装着したシカの行動解析
- ・達古武地域以外の場所における捕獲適地の検討

### 2. 罠による捕獲手法検討

捕獲手法検討は表 1-1 で示す地域において業務を実施した。

表 1-1 捕獲手法検討を実施した箇所

地域名	実施項目	備考
達古武地域	捕獲手法の検討（試験捕獲） ・大型囲いワナ ・ワイヤーメッシュ式ワナ ・体重計測式ワナ	H26 年度から、大型 囲いワナの位置変更
茅沼地区	捕獲候補地の選定 ・試験餌付け ・自動撮影装置による観察 ・痕跡調査、ヒアリング等	2 か所
塘路地区		3 か所
鶴居地区		2 か所

実施内容のうち、捕獲手法の検討のための捕獲試験は、過年度と同様に達古武湖北岸の環境省所管地において実施した。この地域で、大型囲いワナ 1 基、簡易囲いワナ 2 基（ワイヤーメッシュ式ワナと体重計測式ワナ）を運用した。

一方、捕獲手法の検討では、現地調査を塘路湖周辺地域と鶴居周辺地域の山林や湿原の林縁部等で実施した。

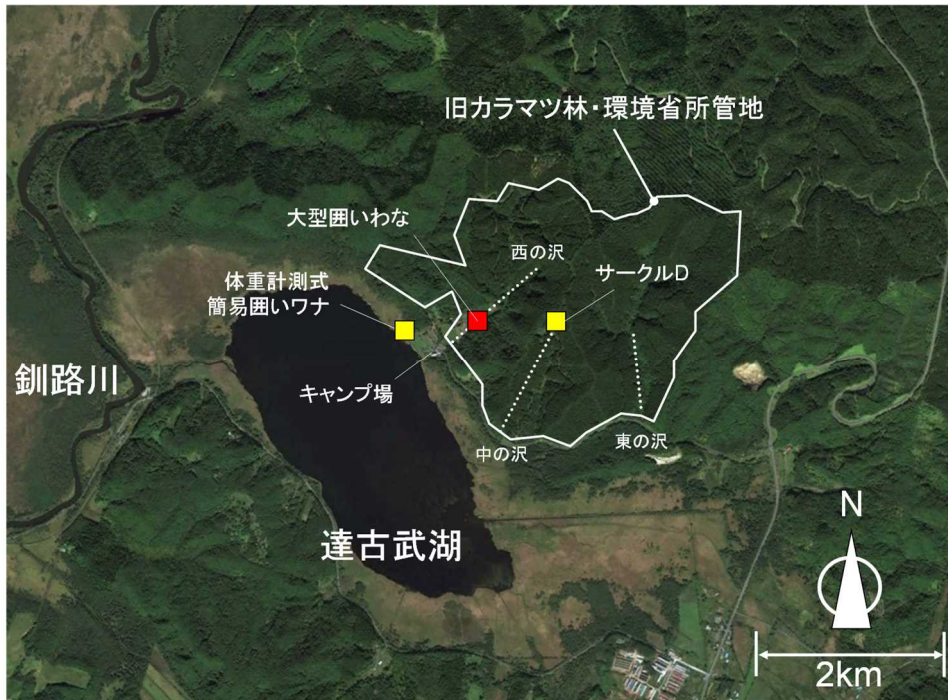


表 2-1 使用したワナと概要

種類	特徴
大型囲いわな	<p>周囲長 50m 以上の囲いわな。過年度から同様のワナを使用している。Web カメラによる監視、遠隔の閉鎖が可能。生体で捕獲し、有効活用しやすい。多数のシカが生息する地域や、餌資源が限られている状況で運用しやすい。平成 26 年度には達古武地域で 1 基で 50 頭以上を捕獲した。</p> <p>規模が大きいため、50m×50m 程度の平坦な土地が必要になる。また、資材が多いためトラック等を持ち入れられなければならない。そのため、湿原内部で利用することは難しい。</p>
ワイヤーメッシュ式ワナ (簡易囲いわな)	<p>4m×4m 程度の簡易囲いわな。ワイヤーメッシュで構築されていて、運搬性に優れ、設置も容易。兵庫県で開発され、本州を中心に広く販売されている。</p> <p>捕獲したシカの有効活用を行う場合は、ワイヤーメッシュ部分を目隠しで覆う必要があり、平成 26 年度業務で改良を加えた。</p>
体重計測式ワナ (簡易囲いわな)	<p>道立総合研究機構が開発したワナ。コンパネで構成されていて、捕獲したシカはあまり傷つかない。体重を計測して自動で閉鎖するために待機労力はかからない。また、体重の設定によっては例えばメス成獣と仔が 1 度で捕獲できるため、個体数調整にも適している。現在も技術開発中であるため、実用性について基礎データを収集している段階。</p>

### 3. 捕獲手法検討の実施場所

#### (1) 大型囲いワナ

##### ①大型囲いワナの設置

本業務で設置した大型囲いワナの模式図を図 2-2 に示す。また、ワナの設置の様子を以下に示す。ワナの設置に先立ち事前の誘引を 1 月 13 日から実施した。ワナの設置は 1 月 21 日～1 月 22 日に行った。

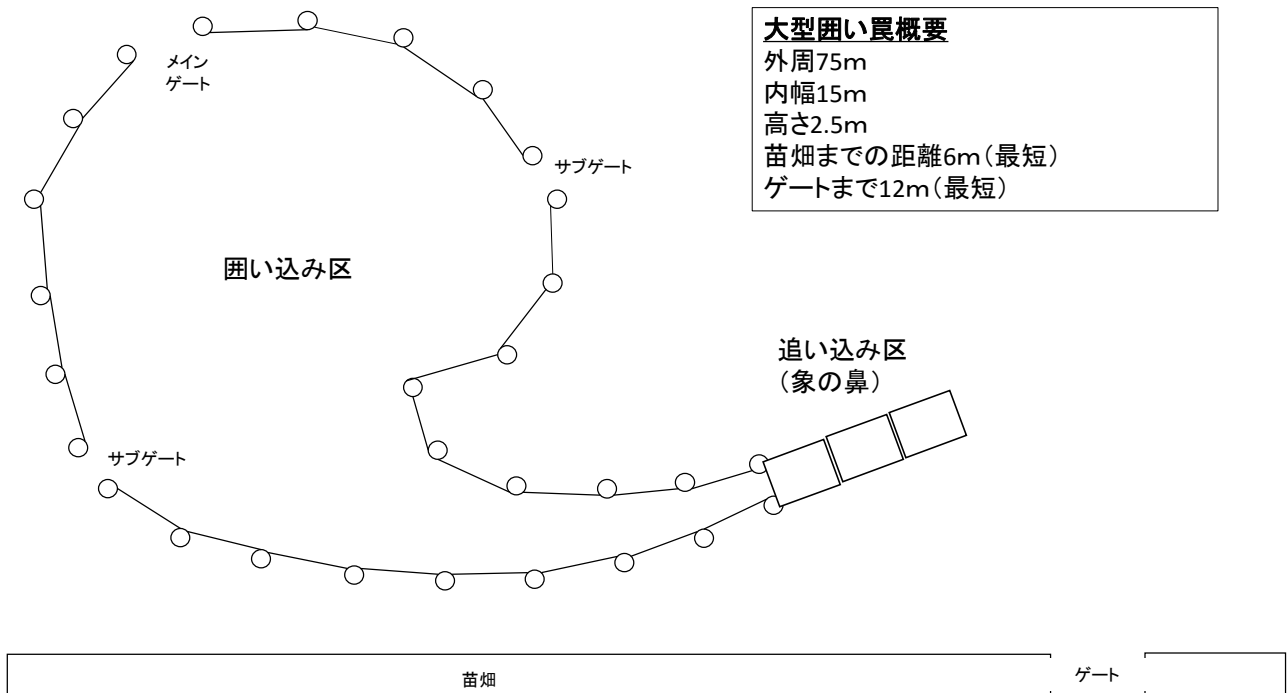


図 2-2 設置したワナの模式図



## ②捕獲結果

捕獲結果の一覧を表 2-2 に示す。また、捕獲の様子を以下に示す。本業務では大型囲いワナ合計 43 頭のシカを捕獲し、その内訳はメス成獣が 26 頭、仔（オス 7 頭、メス 10 頭）であった。

表 2-2-1 大型囲いワナにおける捕獲結果一覧

日付	♂成獣	♀成獣	♂仔 (当歳)	♀仔 (当歳)	合計	備考
2月8日	0	6	2	1	9	2頭放獣 標識個体
2月24日	0	9	3	2	14	2頭放獣 標識個体
3月1日	0	4	3	1	8	
3月3日	0	4	1	3	8	
3月10日	0	3	1	0	4	
計	0	26	10	7	43	

捕獲の回数を重ねていっても、誘引されるシカが極端にワナを忌避するようなそぶりはあまり見られなかった。ただ、ある程度捕獲した後の3月には、ワナ周辺には3頭～5頭程度のシカしかおらず、ワナ内にもまれに2～3頭が進入する程度となった。この要因としては、ある程度この大型囲いワナで周辺のシカを捕獲したこと、雪解けが例年よりも早く進行してシカが移動したことなどが3月以降の頭数の少なくなったこと、などが挙げられる。

表 2-2-2 大型囲いワナにおける捕獲結果（過年次）

日付	♂成獣	♀成獣	♂仔 (当歳)	♀仔 (当歳)	合計	備考
平成 25 年	...	...	...	...	49	中の沢奥（メス・仔）
平成 26 年	1	21	38		59	中の沢奥
平成 27 年	0	26	10	7	43	西の沢奥

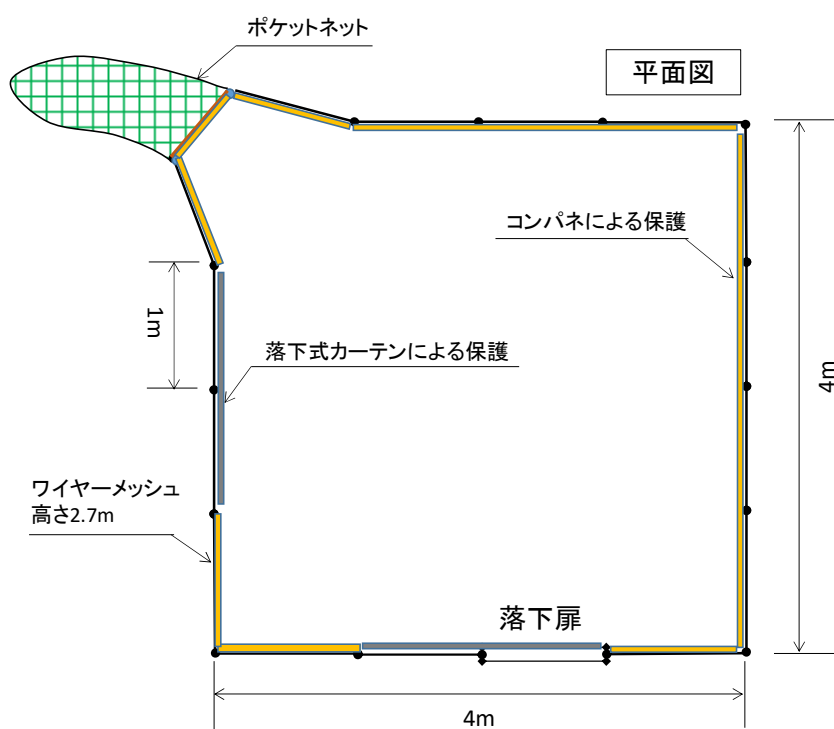
## (2) 簡易囲いワナ (ワイヤーメッシュ式ワナ)

### ①使用したワナの構造

本業務では、捕獲個体の有効活用を念頭に、ワイヤーメッシュで作成されているワナ（以下、「ワイヤーメッシュ式ワナ」とする。）に目隠しを施し、シカの激突を防ぐ構造を模索した。これは、平成 26 年度の事業で試行したことがあるシステムだが、平成 26 年度は改良してからの捕獲回数が少なく、有用性についてはサンプル数が少なかった。本年度はさらに素材等に改良を加え、再度試行することとした。

### ②ワナの設置

改良版のワイヤーメッシュ式ワナは、昨年度まで大型囲いワナを設置していた「中の沢」上流部の土場近くに設置した。土地が少し傾斜しているため、扉の開鎖がスムーズになるように、扉の位置や傾きに配慮した。



### ③捕獲結果概要

ワイヤーメッシュ式ワナで7頭を捕獲した。内訳は、オス成獣1頭、メス成獣2頭、仔4頭（オス3頭、メス1頭）であった。

表 2-3 ワイヤーメッシュ式ワナにて捕獲したシカの一覧

日付	♂成獣	♀成獣	♂仔 (当歳)	♀仔 (当歳)	合計	備考
2月11日	0	1	0	1	2	
2月18日	1	1	1	0	3	
2月25日	0	0	2	0	2	ノイヌに吠えられる
計	1	2	3	1	7	

### ④捕獲した個体の損傷についての考察

7頭捕獲した中の、初回の2頭、2回目の3頭については、若干の内出血があったものの大きな損傷なく止めさしをできた。外部的な損傷はそれほど大きくなく、吻の周囲に若干の外傷が観察された。止めさし後に解剖して観察すると、筋肉にはやや内出血が見られる箇所が観察された。

最後の2頭を捕獲した際は、目隠しのカーテンシートが何らかの原因で捲れ上がってしまっており、シートとワイヤーメッシュの隙間にシカが入ってしまったこと、稀に出現するノイヌが、一晩中捕獲されたシカの傍（ワナの外）から吠え続けていたことなどが原因で、シカがパニックになったものと考えられた。複合的な要因とはいえ、目隠しシートの作動不良により、捕獲したシカは大きく損傷し、解剖の結果、骨盤が損傷し、食肉としての有効活用はもとより、個人消費も難しいほどの程度であったため、一般廃棄物として処理した。

この簡易囲いワナを設置した箇所では、大型囲いワナで昨年度は50頭以上を捕獲した実績がある。こういった場所でも、警戒心が上がってしまうと継続的な捕獲が難しい。恐らく、目隠しシートを取り払えば、再びシカがワナに進入するものと考えられるが、その場合、捕獲したシカは止めさし時に著しく損傷し、少なくとも有効活用には供せないものと思われた。

表 2-3-2 ワイヤーメッシュ式ワナにおける捕獲結果（過年次）

日付	♂成獣	♀成獣	♂仔 (当歳)	♀仔 (当歳)	合計	備考
平成26年	0	2	5		7	西の沢奥
平成27年	1	2	3	1	7	中の沢奥

#### (4) 体重計測式簡易囲いワナ

##### ①ワナの概要

体重計測式簡易囲いワナは、ワナに進入したシカの体重を、体重計で計測して一定の閾値に達するとワナが自動的に閉鎖する仕組みとなっている。体重計測式ワナは北海道立総合研究機構が現在研究開発を行っているものである。

本年度は、1基を試験的に設置して、その有用性について検討することとした。特にヨシ等が繁茂する湿原内に設置した際に、下層植生等にどのような影響が生じるか、将来的に湿原境界域においてどれほど使用できるかということについて検討を行うこととした。

体重計測式ワナは、設定体重を自由に変更することができることから、従来の「蹴り糸」式のように、仔ばかりを捕獲する仕組みではなく、親仔のような多頭数で捕獲できることが利点である。また、地中に埋めるペグ類は必要最低限で、地面にはベースフレームがあって、湿地に潜り込まないことも利点といえる。

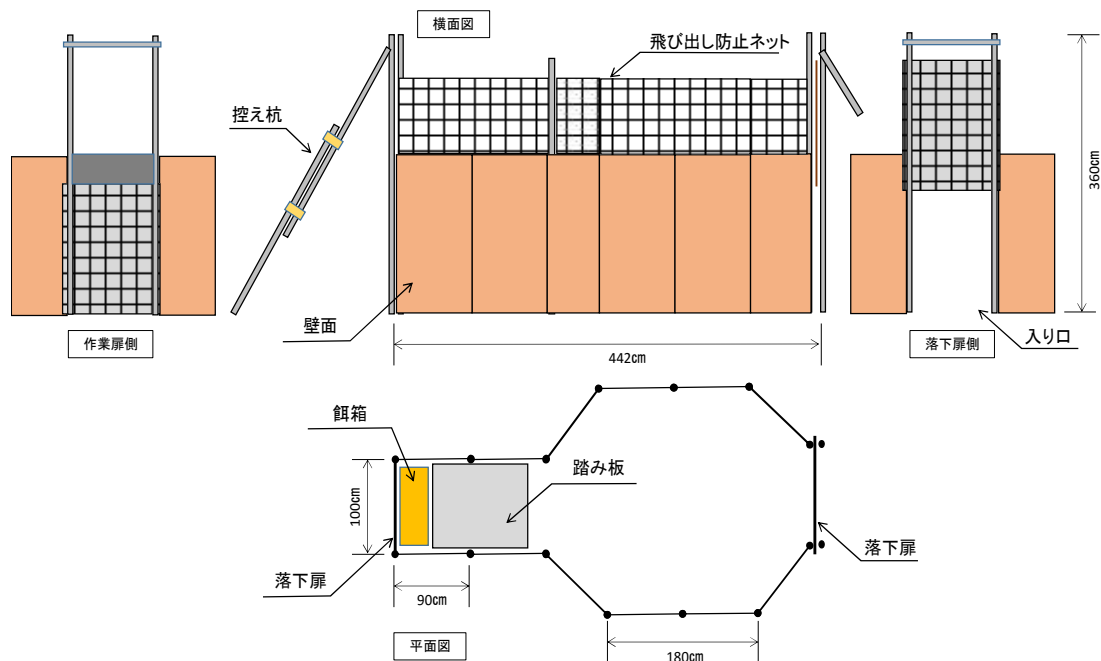


図 2-9 体重計測式囲いワナの構造



## ②誘引と捕獲作業の概要

本業務では、この体重計測式ワナによる捕獲実績は得られなかった。ワナには複数のシカが誘引されており、実際にワナの中にもシカが進入して踏み板に乗って採食している様子が観察されていた。しかし、仔が単独で入ることが多く、複数頭数で捕獲することを狙っていたため体重設定を重くしており、捕獲に至らなかった。

## (5) 小括：捕獲結果と考察

大型囲いワナは、そのような状況でも43頭の捕獲を行うことができた。3月10日まで捕獲ができており、その後もワナにシカがしばしば進入することも観察されていた。

ワイヤーメッシュ式の簡易囲いワナは、捕獲初期は捕獲が進んだが、すぐに捕獲効率が低下し、3月初旬にはほとんどワナにシカが入らない状況となった。ワナに警戒している様子が観察された。達古武地域はシカの警戒心も薄く、また近くに設置していた大型囲いワナでは40頭以上捕獲していることから考えると、このワナの現在の運用方法（夜に捕獲して、朝まで放置する）では、捕獲数に限界があるように思われた。

体重計測式の簡易囲いワナは、残念ながら捕獲を得られなかった。しかし、ワナ内には確実にシカが進入し、餌を採食していたため、捕獲しようとするればいつでもできるという状態ではあったことが確認できた。ワナを設置していた場所の下層植生や、土壌には大きな影響は見られなかった。餌箱を使用して餌を撒いているので、撤去後もその場を清潔に保つことができたと考えられる。それとは別に、誘引餌によって集まってきたシカにより、周辺のヨシがなぎ倒されたり、地際の新芽が採食されたりといった影響が観察された。湿原域で囲いワナを用いると、このような影響がでるものと考えられる。

本業務の中で試行した捕獲手法では、達古武地域では、やはり大型囲いワナが効率よく、かつシカにも安全に捕獲することができたと考えられる。体重計測式のワナは、引き続き基礎情報を収集していく必要があると思われる。ワイヤーメッシュ式のワナは止めさしが大きな課題であり、さらなる技術的な改良が必要であると考えられた。